

日蓮大聖人御書全集

さじきのにようぼうごへんじ

桟敷女房御返事

むりようむへん くどく こと

(無量無辺の功德の事)

ほけきょう によん ほとけ そうちう
法華経の女人とこそ仏はしろしめされて 候 らんに、また
われ 心 発 ほけきょう おん おん 送
我とこころをおこして、法華経の御ために御かたびらおく
りたびて 候。

ほけきょう ぎようじや ににん しょうにん かわ
法華経の行者に一人あり。聖人は皮をはいで文字を
写 ぼんぶ 着 かわ 剥 ほけきょう
うつす。凡夫はただひとつきて候かたびらなどを法華経の
ぎようじや くよう かわ 剥
行者に供養すれば、皮をはぐうちに仏おさめさせ給うな
り。この人のかたびらは、法華経の六万九千三百八十四の
もんじ ほとけ 進 たま ほけきょう ろくまんくせんせんせんびやくはちじゅうし
文字の仏にまいらせさせ給いぬれば、六万九千三百
はちじゅうし ろくまんくせんせんせんびやくはちじゅうし
八十四のかたびらなり。また六万九千三百八十四の仏、
ほとけ

いちいち

ろくまんくせんさんびやくはちじゅうし

もんじ

帷

またかくのごとし。

春

の

せんり

草

満

そうちら

たとえば、はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わん

少

まめ

ひ

草

放

に、すこしきの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、

いちじ

むりょうむへん

ひ

帷

一時に無量無辺の火となる。このかたびらも、またかくのごとし。一つのかたびらなれども、法華経の一切の文字の仏にたてまつるべし。

奉

くどく

ふぼ

そふぼ

ないしむへん

しゅじょう

及

この功德は、父母・祖父母、乃至無辺の衆生にもおよぼしてん。まして、我がいとおしとおもうおとこ・こは申す

わ

愛

夫

子

もう

およ

に及ばずと、おぼしめすべし。

思

恐々謹言。

きょうきょうきんげん

にちれん

日蓮

花押

かおう

ごがつにじゅうごにち

五月二十五日

桜敷さじき女房御返事